

岩手県におけるブドウ '紅伊豆' の着果基準

鈴木 哲・佐々木 誠 二*・小野田 和 夫

(岩手県農業研究センター・*久慈農業改良普及センター)

Bearing Standard of Grape 'Beniizu' in Iwate Prefecture

Satoru SUZUKI, Seiji SASAKI* and Kazuo ONODA

(Iwate Agricultural Research Center・*Kuji Agricultural Extension Service Center)

1 はじめに

岩手県の大粒種ぶどうの主要品種 '紅伊豆' は、徐々に栽培面積が拡大されており、その評価も高まってきているが、着果基準について明らかでない点があった。そこで '紅伊豆' の着果基準について検討した。

2 試験方法

(1) 適正着果量試験

- 1) 供試樹：紅伊豆/S04 平棚長梢仕立
- 2) 試験区の構成：表 1

表 1 試験区の構成

年次	試験区 (粒/葉)	樹齡
1994	0.5, 1.0, 1.5, 2.0	12
1995	0.5, 1.0, 1.5	13
1996	1.0, 1.25, 1.5	14

- 3) 試験規模：1区1亜主枝 2反復

4) 処理方法及び時期：1994, 1995年は7月下旬に新梢が重なり合わないよう枝かき(夏期剪定)を行い、所定の着果量となるよう調整した。その後発生する新梢葉は剪除した。1996年は8月上旬に棚面積と葉面積から各区の葉面積指数(LAI)を2.0に調整した。葉面積は、新梢長と新梢当たりの葉面積の相関を求め、各区の全新梢長を調査し求めた。同日所定の着果量となるよう調整した。1房

当たりの着粒数は35粒とした。

(2) 適正葉面積指数試験

- 1) 供試樹：紅伊豆/S04 (14年生) 平棚長梢仕立
- 2) 試験区の構成：成葉1枚当たりの着粒数を1.25粒とし、葉面積指数を1.5, 2.0, 2.5の3区設置した。
- 3) 試験規模：1区1亜主枝 2反復
- 4) 処理方法及び時期：1996年8月2日に棚面積と葉面積から各区の葉面積指数を所定の量に調整した。葉面積は、新梢長と新梢当たりの葉面積の相関を求め、各区の全新梢長を調査し求めた。同日所定の着果量(1.25粒/葉)となるよう調整した。1房当たりの着粒数は35粒とした。

(3) 適正新梢長試験

1) 紅伊豆/5BBを用い新梢の長さ別の8月上旬までの新梢停止率と、枝の登熟割合を調査した。新梢停止率は、1993~1996年までの4カ年、登熟割合は1996年に調査を行った。

3 試験結果及び考察

(1) 1994年試験：1葉当たりの粒数が多くなると糖度が低くなる傾向が認められた。また、1葉当たりの粒数が少ないほど着色が良好となり、2.0粒区の着色は不良であった。開花期の天候が不良であったことから花振るいが強い中で1新梢単位で調整したため、B, C, D区は強摘心状態での試験となったが、2.0粒区は過着果と判断された。着果負担量は2.0粒区で20.1g/葉であった。

(2) 1995年試験：糖度は、0.5粒区と1.0粒区はほぼ同等

表 2 着果強度の違いによる果実品質 (1994年)

試験区	房重 (g)	1粒重 (g)	糖度 (Brix%)	酸度 (g/100ml)	着果負担量 (g/葉)
A 0.5粒/成葉1枚	77.5	8.7	17.7	0.54	4.4
B 1.0粒/成葉1枚	130.6	10.1	17.9	0.54	10.1
C 1.5粒/成葉1枚	151.5	9.8	17.6	0.55	14.7
D 2.0粒/成葉1枚	113.7	10.1	17.5	0.52	20.1

表 3 着果強度の違いによる果実品質 (1995年)

試験区	房重 (g)	1粒重 (g)	糖度 (Brix%)	酸度 (g/100ml)	着果負担量 (g/葉)
A 0.5粒/成葉1枚	295.8	10.1	18.4	0.59	5.1
B 1.0粒/成葉1枚	306.0	9.8	18.1	0.56	9.8
C 1.5粒/成葉1枚	312.8	10.2	17.3	0.62	15.3

であったが、1.5粒区は17%を越えたものの低かった。酸度は、1.5粒区でやや高くなる傾向であった。着色は果色別の果房分布をみると、1葉当たりの粒数が少ないほど赤色の濃い果房が多く、1.5粒区は明らかに着色不足である果房が多かった。着果負担量は1.5粒区で15.3g/葉であった。

(3) 1996年試験：糖度は1.5粒区で16.3%と低かった。酸度は、1.5粒区でやや高かった。粒重は、1.0粒区で重い傾向であった。着色は1.5粒区で、着色不良果実の割合が高く、着果量が多いほど、着色時期が遅れる傾向であった。着果負担量は1.5粒区で14.0g/葉、1.25粒区で11.6g/葉であった。

表4 着果強度の違いによる収量と果実品質 (1996年)

試験区	収量 (kg/10a)	房重 (g)	1粒重 (g)	糖度 (Brix%)	酸度 (g/100ml)	着果負担量 (g/葉)
A 1.0粒/成葉1枚	975	303.4	10.2	17.0	0.52	10.2
B 1.25粒/成葉1枚	1,119	325.7	9.3	17.0	0.52	11.6
C 1.5粒/成葉1枚	1,330	316.7	9.3	16.3	0.54	14.0

表5 着果強度の違いによる果房の着色割合 (1996年)

試験区	果色 (C. C. No.)					
	薄 ← 赤色 → 濃					
	0405	0406	0407	0408	0409	0410
A 1.0粒/成葉1葉	0.0	3.6	14.3	57.1	25.0	0.0
B 1.25粒/成葉1葉	0.0	2.9	25.7	40.0	25.7	5.7
C 1.5粒/成葉1葉	2.6	10.3	34.6	42.3	7.7	2.6

(4) 適正葉面積指数試験：糖度は葉面積指数が大きいほど低く、酸度は葉面積指数が大きいほど高い傾向であった。粒重及び着色の程度に一定の傾向は認められなかったが、透光率は葉面積指数が高いほど低くなり、葉面積指数2.5区の透光率は18%と過繁茂状態であると考えられた。

表6 葉面積指数の違いによる収量と果実品質 (1996年)

試験区	収量 (kg/10a)	房重 (g)	1粒重 (g)	糖度 (Brix%)	酸度 (g/100ml)
A LAI 1.5	825	296.2	9.2	17.8	0.49
B LAI 2.0	1,119	325.7	9.3	17.0	0.52
C LAI 2.5	1,368	315.7	9.1	16.9	0.53

(5) 適正新梢長試験：新梢が長いほど、8月上旬までの新梢停止率が低くなり、新梢長226cm以上では、8月上旬以降まで伸びる新梢の割合が80%以上と高く、逆に新梢が短いほど、登熟割合は低くなった。

4 まとめ

以上から‘紅伊豆’の成葉1枚当たりの着果負担量は、12g程度が適当であり、これ以下では、果実品質は良好となるが、収量が低くなる。また、これ以上では、収量が高くなるが、着色不良、低糖度、高酸度となり、果実品質が低下すると考えられた。

‘紅伊豆’の葉面積指数(LAI)は、2.0程度が適当であり、1.5では、糖度は高く、酸度は低く、着色も良くなるが収量が劣る。2.5では収量が高くなるが、糖度が低く、酸度が高く、透光率が18.0%と過繁茂状態となり、着色への悪影響が考えられた。

‘紅伊豆’の平均新梢長は、150cm(葉枚数23枚)程度が適当であり、100cm以下の伸びでは、登熟率が低下し、結果母枝として利用できない新梢が多くなり、200cm以上の伸びでは、新梢の停止期が8月上旬以降となるため、養分の浪費となると考えられた。